

# 揺動と不動

——中西伊之助の「不逞鮮人」と「北鮮の一夜」——

黄 善 英

一 はじめに

「不逞鮮人」は一九二二年『改造』九月号に発表された作品である。戦後にそれを書き換えて再発表したのが「北鮮の一夜」である。それは一九四八年に人民戦線社から出た『北鮮の一夜』という作品集に収められている。

作者の中西伊之助は、一八八七年に京都府で生まれ、二十歳の頃から社会主義に傾倒するようになる。一九一一年頃彼が二十四歳の時に朝鮮に渡り、一九一二年には『平壤日々新聞』の記者となるが、鉾山における労働者虐待に関する暴露記事を書いて、「信用損害罪」で投獄され懲役四ヶ月の実刑を受けている。<sup>(1)</sup>

「不逞鮮人」は中西伊之助が平壤における三・一運動の展開ぶりに衝撃を受けて書いた作品だ<sup>(2)</sup>というが、この作品の内容は、社会主義者である日本人青年榮策が「不逞鮮人」と言わ

れている、つまり独立運動家である朝鮮人の家を訪ね、そこで一晩泊めてもらうまでの過程における内面の葛藤を描いたものがある。「不逞鮮人」が発表された当時、生田長江はこの作品が「通り掛かつた総ての人々へ「敵か？味方か？」と浴びせかけてゐる」と評した<sup>(3)</sup>。その後、森山重雄は、この作品が「日朝間の心理のコンプレックスを突いている」と指摘している<sup>(4)</sup>。

本論文では、同じストーリーを持っている二つのテキスト、即ち戦前に発表された「不逞鮮人」と戦後に発表された「北鮮の一夜」を比較して読むことで、その二つのテキストの違いを明らかにし、それを通してそれぞれのテキストに現れている朝鮮に対する認識について考えてみたい。そして、二つのテキストの変化の原因についても考察してみたいと思う。



いう意味の宣言であつた。この宣言は世界に於て人種的差別に悩み、被壓迫民族の痛苦を嘗めてゐるところのあらゆる人類を歡喜させ、希望に勇躍させたのであつた。日本の帝國主義的侵略の下に虐げられてゐる朝鮮民族は、この宣言によつてアメリカが日本の手より我々を解放してくれるであらうといふ希望を抱いたのである。(「北鮮の一夜」五三―五四頁)

これは、「不逞鮮人」で削除されていたところをそのまま再現したものではないと思われる。まず字数が合わない。「不逞鮮人」では「(以下五十二行缺)」となつており、それを字数で換算するとおよそ二七五六字が削除されたことになるが、「北鮮の一夜」では、八八〇字が書き加えられたにすぎない。また内容においても、「不逞鮮人」では「主人の語つてゐる事柄の内容」とあまりにも冷静な「主人」の「表情」が「全く背中合せになつてゐる」と語り手が語つてゐるのを見てわかるように、前後の文脈からして削除されている部分は「主人」が自分の娘が殺されることになつた経緯について詳しく語つていたことが予想される。だが、「北鮮の一夜」ではそれが三・一運動が起るることになつた経緯について語り手が説明する形になっている。そして、ここで注目されるのは、語り手がこの部分で「アメリカのウイルソンによつて「民族自

決」が宣言」されたことを説明し、「これはアメリカにとつて建國精神」であると述べ、世界のあらゆる民族が「獨立國家」を持つべきであることを強調していることである。そしてこの部分では「アメリカ」という言葉が三回も登場していることも注目される。

周知のように、「北鮮の一夜」が発表された一九四八年には、日本がアメリカの占領軍の支配下に置かれていた時期である。そして、その当時アメリカという国は日本の運命を握つていたと言つても過言ではない。従つて、ここで用いられている「アメリカ」「獨立國家」という言葉も当時日本が置かれていた立場と緊密に結び付いてると考えられる。この問題については後で詳しく論じることにする。

このように内容が変わつたことによつてテキストと読者との関係はどのように変わったのだろうか。三・一運動に参加した少女が殺されることになつた経緯を詳しく描写するといふことは、相対的に日本の警察や憲兵隊の残虐さが強調されることになる。それによつて、読者は心情的に殺された少女に同情し、感情移入しやすくなる。要するに、そのような文章は読者の感情に直接に訴えかけ、読者が日本の植民地支配について考え直してみるように揺り動かす可能性を含んでいるのである。従つて、「不逞鮮人」では支配する側である日本と支配される側である朝鮮との関係性にポイントが置かれて

いると言える。けれども、「北鮮の一夜」ではそのような生きさが消えて平淡な説明になっている分、読者の感情に直接に訴えかける力がなくなり、読者を当事者としての感覚から遠ざけることになる。そして、ここではむしろ「アメリカ」という国の存在にポイントが置かれていることを指摘しておきたい。

## (2) 削除

次は、「不逞鮮人」には入っていたが、「北鮮の一夜」では抜けている所を見てみたい。榮策は朝鮮人の通訳と二人で「主人」が住んでいる山奥の村を訪ねて行くのだが、その道の途中には川があり、その川を渡るために船頭に舟に乗せてくれるように頼むが、船頭は日本人である榮策に対して露骨に反感を示し、舟に乗せないと言う。その時の場面は「不逞鮮人」では次のようになっている。

『君、その船頭は僕が内地人だから渡さないと云ふのだからうね……?』

と榮策はそれでもなにか他に理由があつてくれればいゝがと、僅かな望みをかけて訊いてみた。けれどそんな期待は見事に裏切られてしまった。通譯は肯づいて苦笑した。榮策は自分の想像が的確なものになつて来たと思ふ

と、むら／＼と本能的な反感がこみあげて来た。人間がある場合にはきつと露骨にさらけ出してしまふ没理性的な我執が、彼の動きの取れない感情となつて来た。ていのいゝ彼の人道感、かうした突嗟の場合に少しも彼の我執を緩和してくれない。彼の肚の底のどこかに潜んでゐたわがままな感情が、不平たら／＼な眼をしてぐつとその船頭を睨みつけさせた。暴力の外には動きそうにもない船頭のふんぞり返つた姿を、榮策は凝つと見てゐると、彼の強い反感が不思議にもいつか一種の痛快味に變つてきた。それはその船頭の姿がそっくり自分のこのころの像になつてゐるやうに思はれてならなかつたからだ。彼はふといままで自分の心持を考へた。そしてそれはなんと云ふ愚蒙だ!と思つた。その愚蒙が——永い間優越感を懐いた人間の心に巣くつてゐるその愚蒙が、多く人間を虐げる手段を講じさせるのだと、彼は思つた。彼はこの楊柳の蔭のプロテスタントを、もう咎める氣にはなれなかつた。彼はその人を祝福するやうな氣になつた。

(「不逞鮮人」一二頁)

この場面は、日本人である自分に反感を示している船頭に対して、榮策が強い反発を感じていることを描写しているところである。榮策は船頭に対して、「むら／＼と本能的な反感」

を覚え、それが「永い間優越感を懐いた人間の心」から出たものであることを述べている。そして、そのような感情が「多くの人間を虐げる」のだと自覚するのである。言い換えれば、この場面は自称「世界主義者」で「人道主義者」である榮策が民族的な反感に直面した瞬間、彼の中に潜んでいた「日本人」としての民族的優越感が表面に浮上して来ることで、自分の中に支配者としての意識が存在していることを自覚し、それを直接に告白している唯一の場面なのである。ここでは、榮策の内面が感情的な面と理性的な面とで分離し、矛盾を起しているのが窺える。理性的には「不逞鮮人」と言われている朝鮮の独立運動家を訪ね、「心から語ってみたい」と思うくらいに被圧迫民族を理解しようとし、支配者である自分達の民族から抜け出ようとしている彼の中にも、意識のどこかには支配者としての植民者意識が潜んでおり、それが感情の面から表出されているのである。要するに、「不逞鮮人」における榮策像は、確固たる「世界主義者」としての榮策ではなく、揺れ動きながら分裂する榮策像なのである。しかし、「北鮮の一夜」ではこの部分が無くなっており、それによってそこにおける榮策像は、自分の意識のどこかにある植民者意識に悩まされることのない確固たる「世界主義者」となっている。そして、もう一個所、「不逞鮮人」にはあったが、「北鮮の一夜」では無くなっているところがある。

と、彼は急に眼險が熱くなつて来て、溢れるやうな感激が胸を息壘らせた。——すべては、自分達民族の負ふべき罪だ。(「不逞鮮人」 五二頁)

これは「不逞鮮人」の最後のところで、作品はこの文章で終わっている。けれども、「北鮮の一夜」ではこの文章が無くなったところで、作品が終わっている。この場面の前には榮策と「主人」との民族的葛藤が描写されている。「不逞鮮人」では、作品の最後に榮策の感激ぶりが誇張ぎみに表現されており、その後、前日の夜の葛藤——即ち民族が異なっているがために互いに疑い合ったこと——の原因がすべて日本の植民地支配にあるということを明確に宣言している。そして読者に向かって同じ日本人として罪悪感を抱くことを強く要求している。そして語り手のこの言葉は、当時の日本人読者に日本の植民地支配について考え直して、それを強く語り掛けている意味があったと思われる。けれども戦後に再発表された「北鮮の一夜」ではこの部分が無くなっており、もう語り手は読者に向かって罪悪感を抱くことを強要しないし、植民地支配についての反省も促してはいない。

### (3) 呼称の変容

相手を指す呼称（または、自分を指す呼称）は、話者が相手と自分との関係性をどのように把握しているかを象徴的に表す側面を持っている。よって、朝鮮を何と呼んでいるか、朝鮮人を何と呼んでいるかを見てみることで、語り手がどのような朝鮮認識を持っていたかを見ることができると思う。実は、「不逞鮮人」から「北鮮の一夜」になった時、一番目立って変わっているのは、朝鮮人に対する呼称である。「不逞鮮人」の中では、朝鮮人を指す表現が「朝鮮人」、「鮮人」、「土人」などであったが、「北鮮の一夜」ではその殆どが「朝鮮人」に変わらされている。

まず、「鮮人」について見てみよう。

① ・それでも改札口には、鮮人らしい驛員が立つてゐた。  
〔不逞鮮人〕三頁

・それでも改札口には、朝鮮人らしい驛員が立つてゐた。  
〔北鮮の一夜〕五頁

② ・今汽車を下りた二三人の鮮人が、晒し金巾かなにかの汚れた包を背負つて歩いて行く  
〔不逞鮮人〕六頁

・今汽車を下りた二三人の朝鮮人が、晒し金巾かなにかの汚れて鼠色になった包を背負つて歩いて行く。

〔北鮮の一夜〕一〇頁

③ ・この鮮人の通譯は、どんな感慨を懐きながら、そんなこ

とを相手に話してゐるだらうかと榮策は思つた。

〔不逞鮮人〕九頁

・この朝鮮人の通譯は、どんな感慨を懐きながら、そんなことを相手に話してゐるのだらうか。

〔北鮮の一夜〕十五頁

④ ・途中であつたやうな眼の凄く荒れくれた鮮人等が、この主人の采配に應じて、月光を浴びながら互に喚びかわして雪崩の如く集つて来るのが心に描かれた。

〔不逞鮮人〕四八頁

・途中であつたやうな眼の凄く荒れくれた朝鮮人等が、この主人の采配に應じて月光を浴びながら互に喚びかわして雪崩の如く集つて来るのが心に描かれた。

〔北鮮の一夜〕七五頁

「不逞鮮人」で、「鮮人」が使われているところを拾い出してみると、①、②、③、④などがある。「鮮人」と呼ばれている対象について見てみると、驛員、汽車を下りた人、通訳、途中で会つた人、などがある。「鮮人」で表現されているのは、話者と距離が離れており、階級的には上流ではない場合であることがわかる。

ところが、ここでもう一つ注目しなければならないのは、同じ通訳であり、汽車から下りた人であっても、場面によって

「朝鮮人」になったり「鮮人」になったりしていることである。例えば、③では通訳のことを「鮮人」と表現しているが、「榮策の伴れて来た朝鮮人の通譯が起ち上がつて彼にかう云ふ。」というところでは同じ通訳のことを「朝鮮人」と表現している。また、汽車から下りた人も②では「鮮人」と言っているが、「一緒に降りる人々は、五六人の朝鮮人ばかりであつたが、」というところでは「朝鮮人」と表現している。この違いは何であるのだろうか。それは主人公である榮策の内面と深く関係していると思われる。

まず、通訳について見てみると、通訳を「朝鮮人」と表現しているところは作品の始めの部分で、汽車が目的地であるS駅についたことを通訳が告げた後の場面であり、この場面で榮策はまだ平穩な気持ちの状態にいる。けれども、③は「不逞鮮人團の根拠地」と言われている山奥の村に近づいてきた時に、榮策の心が恐怖心に駆られている場面である。汽車を下りた人に対して、「朝鮮人」と言っているところは、まだ榮策が平穩な心理状態であった時である。しかし、②は榮策がいよいよ山奥の村に向かつて歩き出そうとした時で、その時彼の心は恐怖に駆られている状態である。このような不安定な榮策の心理状態が「鮮人」という表現に反映されているのではないかと思われる。

次は、「土人」が使われている所を見てみよう。

⑤ 土人には珍しく二人ほど行き會つたが、榮策の背廣姿をぢろぢろと眺める。  
〔不逞鮮人〕八頁

・朝鮮人には珍しく三度も行き會つたが、榮策の背廣姿をぢろぢろと眺める。  
〔北鮮の一夜〕十三頁

⑥ 榮策は今そこで出會つた土人の眼を聯想した。その土人の眼とこの河とが、この地方の一對の氣分をそっくりくり出してゐるやうな感じがされる。  
〔不逞鮮人〕一〇頁

・榮策は今そこで出會つた土人の眼を聯想した。その人の眼とこの河とが、この地方一對の氣分をそっくり作り出してゐるやうな感じがされる。  
〔北鮮の一夜〕十六頁

ここで「土人」と呼ばれている対象は、「不逞鮮人」と呼ばれている「主人」が住んでいる山奥の村に住んでいる人々である。「土人」という言葉は元々「その土地に住んでいる人」という意味であった。それが江戸時代末期以降、日本人が他のアジアの地域に出かけるようになってから、「その土地に住んでいる人」を蔑視するニュアンスを帯びるようになり、相手を差別する表現として使われるようになったのである。しかし、すべての「土人」という言葉が必ずしも差別的なニュアンスを含んでいるとは断定できないと思う。ここで使われて

いる「土人」という言葉は、他の地域の朝鮮人と区別するために、主人公が訪ねた山奥の村の人々にだけ使われている。すると、ここでは「その土地に住んでいる人」という意味合いで使われていると考えるのが自然ではないだろうか。

しかし、ここで問題となるのは「その土地」がどのような土地であるか、ということである。「その土地」は「不逞鮮人團の根拠地」であり、日本人が殺された事件が多発している、日本人にとっては非常に危険な地域である。即ち、語り手が「土人」という表現を使って、他の地域の朝鮮人とその地域に住んでいる朝鮮人を区別している根底には、その地域に住んでいる人々の特殊な性質、即ち彼等が日本人に対して強い反感を持っており、またそれを行動で示すという暴力的な性質の持ち主であることが強調され、榮策がそれを恐れる気持ちが含まれているのである。「土人」という表現が使われている場面はすべて、榮策がその「土人達」に恐怖心を抱いている場面である。

要するに、「鮮人」、「土人」という表現には榮策の不安な気持ち<sup>3</sup>が反映され、彼の中で日本人である自分と朝鮮人である相手との民族的緊張感が高まっていることが現れているのである。言い換えれば、榮策が不安な気持ちになっている時、その根底には民族的対立意識があるのであり、そのような民族的対立意識が「朝鮮人」という表現より差別感のある「鮮人」、

「土人」という表現を選ばせているのだと思われる。

また、日本人に対する表現も、榮策が「不逞鮮人」では「内地人」と言っていたところが「北鮮の一夜」では「日本人」に変わっている。しかし、このような呼称の変化は榮策の発話の部分と榮策の視点を取っている語り手の言葉だけであり、朝鮮人の通訳が発話している部分は「内地人」、「鮮人」という表現が直されず、そのままになっている。これを見ると、「北鮮の一夜」では「内地人」「鮮人」という表現を使っている通訳に比べ「日本人」「朝鮮人」という表現を用いている榮策の方が相対的に民族的偏見のない人物として描かれているのがわかる。

今まで述べてきたように、戦前に発表された「不逞鮮人」には被圧迫民族である朝鮮人に対する理解が基調になっているとともに、一方では植民者意識や階級差別意識そして民族的対立意識なども表れており、そこにおける日本人主人公榮策像は揺れ動きながら分裂し矛盾を起こしているものであった。そして、このテキストでは視点のポイントが支配している日本と支配されている朝鮮との関係性に置かれている。けれども戦後に再発表された「北鮮の一夜」では「不逞鮮人」に表れていた矛盾した意識が直されており、そこにおける日本人主人公像は揺れ動くことのない確固たる「世界主義者」と変えられていた。そして、そこでは「不逞鮮人」には見られな



かった「アメリカ」という国の存在に焦点が当てられているのである。ではこのような変化の原因は何であろうか。次はその変化の原因について考えてみたい。

### 三 『改造』と人民戦線社

戦前に「不逞鮮人」が発表されたのが『改造』という雑誌で、戦後に「北鮮の一夜」が発表されたのが人民戦線社という出版社から出た単行本であることは、このようなテキストの変化を理解する上で大変重要であると思われる。テキストが発表される媒体はそれぞれ固有の編集方針を持ち、それに基づき読者像を想定している。従って、ある媒体に作品を発表する際、作者もその媒体の読者像を意識して作品を書くことになると思われる。すべての作品がそうだとは言いつてもいいが、少なくとも本論文で対象にしている二つのテキストは各媒体の性格を強く意識して書かれたものであることは言えると思う。以下、それについて述べてみたい。

まず、一九二〇年代における『改造』はどのような性格を持つ雑誌で、どのような読者像を設定していたのかについて見てみよう。『改造』が創刊されたのは一九一九年四月三日で、続いて二号、三号が出されたものの、その売れ行きは芳しくなかった。そこで第四号から社長の山本実彦が編集から手を引き、横関愛造が編集の指揮を取るようになり、編集方針が

大転換することになる。編集方針が大転換した第四号の特集は「労働問題・社会主義・批判号」となっている。このような『改造』の論調は当時かなり急進的なものであった。<sup>(7)</sup>

同時に大きく変わったことは、「編集の視点を労働者階級にむけはじめたこと、これが読者層の拡大につながったこと」<sup>(8)</sup>である。例えば、川崎造船闘争との関連においても、当時の『読売新聞』には、川崎の意業は『改造』九月号の記事によって暗示せられたものだという賀川豊彦氏の談話を織り込んだ誇大な報道が現れ、「この時すでに、新生の雑誌『改造』が、かつては殆ど読書界の圏外に立っていた、新興階級との間に、その影響を拡大し、若しくは拡大しつつあったことだけは疑いのない事実であった」<sup>(9)</sup>のである。

そして、一九二〇年一月号から賀川豊彦の「死線を超えて」の連載が始まった。はじめ小説として連載された時のことを横関は次のように言っている。「これは非常に反対があった。ことに作家の方面から、あんなくだらないものをひどいじゃないかという。けれど私はあれを四回（実際は五回—引用者）続けた。というのは、製本屋の小僧があれを製本しながら読んで、これが二号、三号を待ち構えていることがわかった。私が聞きますと、あれまた来月出ますかと聞くのです」<sup>(10)</sup>。これを見ても、『改造』の読者が底辺の読者層にあったことがわかる。同年十月に『死線を超えて』は改造社から単行本として発売

されたが、たちまち二十万部を超える大ベストセラーとなった<sup>(11)</sup>。これと関連して中西は、「賀川豊彦は『死線』出版してすばらしい景気だ。毎日代り代りやって来る労働者の中に、それを一冊持っているのがいた。『ちょっと見せたまへ』といつて、私はよんでみたが、うむ、これくらいなら俺にだってかけると呟いた。これがそもそも、私に畑違いな野心を持たせる機縁となった。」と書いている<sup>(12)</sup>。つまり、中西が『改造』という雑誌に作品を発表することになった背景には、『改造』が労働者階級を読者層として持っているということが大きく作用しているのである。従って、『改造』に発表された「不逞鮮人」も労働者階級を主な読者として意識していたことがわかる。

次は人民戦線社がどのような性格を持った出版社なのかについて見てみよう。人民戦線社から出している出版物の中で一番重要なのは、『人民戦線』という雑誌である。この雑誌は「人民文化同盟」の機関紙<sup>(13)</sup>であり、中西伊之助が主筆、編集兼発行人となっている。「人民文化同盟」は共産党傘下の文化運動団体である。そして『人民戦線』は会員たちに配られる雑誌であり、共産党の地方機関紙のような性格を持っている。そして、その雑誌を発行していた人民戦線社は、単行本としては主に中西の著作物を出している。つまり、人民戦線社から出た出版物の読者層は、主に「人民文化同盟」の会員、つまり共産党員であったのである。また、中西は一九四六年、一

九四九年の衆議院選で共産党所属で当選しており、一九四八年には主に共産党所属の政治家として活動している。この時期の中西の思想は当時の共産党と密接に結び付いていると思われるので、ここで当時の日本共産党と占領軍との関係について見てみるのも無駄ではないだろう。

一九四五年十月十日政治犯が釈放され、共産党幹部十六名が出獄、共産党の合法化、十二月労働組合法が立法されるに伴って、日本共産党は活発な活動を開始するようになった。この時期の共産党の占領軍に対する態度を見てみると、「一、ファシズム及び軍国主義からの世界解放のための連合国軍隊の日本進駐によって日本に於ける民主主義革命の端緒が開かれたことに対して我々は深甚の感謝の意を表す。二、米英及び連合諸国の平和政策に対しては我々は積極的に之を支持する<sup>(14)</sup>。」となっており、共産党が占領軍を歓迎していたことが窺える。また、この時の「日本共産党行動綱領草案」の中の「実践的要求」を見ると「六、人種、民族、国籍による差別待遇反対<sup>(15)</sup>。」という項目があり、「日本共産党規約草案」には「党組織の系統」に「朝鮮人部」が入っているのをみると、朝鮮との関係性も重要視されていたことが垣間見られる。

しかし、一九四六年五月十二日に行われた米よこせデモに対して、マッカーサーは五月二〇日に団体的暴力を認めない<sup>(16)</sup>と警告を発し、一九四七年二月一日に計画されていたゼネス

トに対して中止命令を発表した。この時、「労働組合の指導者たちは人々の前で涙を流し、より急進的な人々は、敵意をむき出しにして、アメリカは「民衆のための」真の民主主義の欺瞞に満ちた敵であると思なすようになった<sup>(17)</sup>」という。この時以降、共産党の占領軍に対する態度は変化する。一九四八年の「日本共産党行動綱領」を見ると、「二、人民による経済復興と日本の完全な独立<sup>(18)</sup>」という項目があり、「党は日本民族の独立と世界平和を確立するために全力をつくす。」という文が「日本共産党改正規約<sup>(19)</sup>」にある。さらに「日本の完全な独立の主張は、軍国主義的排外主義でないどころか、ポツダム宣言に完全に立脚するものである（中略）国の完全独立、民族の独立の主張は、民主主義的諸原則の一つである。」と書かれているのを見ても、一九四八年における日本共産党は「日本の独立」という問題を全面的に掲げていたことがわかる<sup>(21)</sup>。

一九四八年の中西のアメリカに対する態度を見てみても、「日本はついに現在のような亡国の運命に落ち入ったのである。建国以来の危機にひんしている現在の日本が、独立日本として世界に再生するのは、日本民族の総意に依る、日本人民の手に依って、日本人民のための政治を樹立することである。」とあり、ここでも「日本の独立」が強調されているのがわかる。

「北鮮の一夜」において「アメリカ」の存在に焦点が置かれ

ていたことは、このような当時の共産党と占領軍との関係性と無関係ではないだろう。また、「北鮮の一夜」の中で強調されていた「獨立国家」が、植民地期における朝鮮の独立の問題だけでなく、占領期における「日本の独立」の問題をも暗示していることがわかる。つまり、「北鮮の一夜」では日本と朝鮮の関係性より日本とアメリカの関係性がより強く意識されていたのである。

一方で、「北鮮の一夜」で朝鮮人に対する呼称が変化した点については、中西が一九二五年八月十四日に朝鮮を訪問した際に、朝鮮人の作家たちから「土人」という表現に対して強い反発を受けたことが一つのきっかけになっていると思われる。また、「人民文化同盟」の綱領の中には「本同盟の目的を支持する者は国籍を問はず、会員と<sup>(24)</sup>」するという項目があり、また朝鮮人連盟とも連帯的な関係にあったので、読者層の中には朝鮮人も入っていると考えられる。それゆえに、朝鮮人に対する軽蔑的な表現を使うのは避けられたのだろう。

このような読者層の違いによるテキストの変化はタイトルの変化にも端的に表れている。「不逞鮮人」というタイトルは、この作品が発表された一九二二年という時点ではかなり挑発的なものであったはずである。というのは、「不逞鮮人」という言葉をタイトルに付け、ストーリーの中で「不逞鮮人」と言われている朝鮮の独立運動家に深く共感を示しているとい

うことは、その当時日本人の読者が当たり前のように使っていたはずの「不逞鮮人」という表現を逆手にとって異議を申し立てるといふ意味があるからである。そして、このタイトルは当時の日本と朝鮮の關係性を象徴的に表しており、その關係性の問題に焦点が当てられている。それは『改造』の読者層が労働者階級であることを意識した啓蒙的なねらいを含んでいると言える。しかし、戦後それが「北鮮の一夜」というタイトルに変わったということは、一九四八年という時点では「不逞鮮人」という言葉は死語になっていたため、「相手」の言葉を逆手にとって異議を申し立てるといふのは難しくなつたと考えられる。加えて、「北鮮」という言葉は一九四八年当時今の朝鮮民主主義人民共和国を指す言葉であり、当時朝鮮半島の北の方では金日成<sup>26</sup>が政権を取ろうとしていた時期なので、北朝鮮に対する革命的連帯意識を表明していることになると思われる。つまり、このタイトルは日本と朝鮮の關係よりはイデオロギー的な連帯の方に焦点が当てられていると言える。そして、これは人民戦線社の読者層である共産党の黨員を意識した語りであると思われる。

#### 四 むすびに代えて

以上見て来たように、戦前に発表された「不逞鮮人」には、揺れ動きながら矛盾している朝鮮認識が見られたが、戦後に

発表された「北鮮の一夜」では、そのような矛盾した意識は直されているのがわかった。そしてそれは発表された媒体の性格の違いと、それに伴う読者層の違いによるものであることがわかった。

そのような変化は政治的な立場から見れば「正しい」と言えるのかも知れない。しかし、それを文学作品として見た時、即ち同時性という観点から見た場合は、「不逞鮮人」の方が当時の日本人の内面をより立体的に捉えていると言える。植民地期における日本人の生々しい心象風景を我々の目の前に曝け出していること、そこにこそ中西の作品を読む意義があるのではないだろうか。

#### 註

- (1) 中西伊之助「愛読者への履歴書」(『新興文学全集』第二卷「中西伊之助・藤森成吉集」所収) 四五〇頁
- (2) 中西伊之助「思い出の北鮮・平壤」(『人民戦線』二五号 一九四八年八月) 二九頁
- (3) 生田長江「九月號の創作から」(『讀賣新聞』一九三二年九月三日)
- (4) 森山重雄「中西伊之助論」(『人文学報』第八〇号 東京都立大文学部 一九七一年) 一五〇頁

- (5) 一方で、「主人」と「主人」に榮策を紹介した朝鮮の青年については、不思議なことに「鮮人」、「土人」という表現はまったく使われていない。「主人」とその青年は二人とも上流階級の人で、榮策とも個人的に密接な関係を持っている人物である。
- (6) それは「鮮人」という言葉が使われている他の場面も同じである。
- (7) 新島繁「日本の文芸雑誌『改造』」(『文学』一九五七年一〇月) 一一一頁
- (8) 小林英三郎他編『雑誌『改造』の四十年』(光和堂 一九七七年) 四五頁
- (9) 山川均『改造』十年の回顧』(『改造』一九二九年四月号) 一一二頁
- (10) 座談会『改造』の三十年』(『改造』第三十一卷 第四号 一九五〇年四月) 一一八頁
- (11) 小林英三郎他編前掲書 五五頁
- (12) 中西伊之助「赭土」を書いた前後その他」(月報『新興文学』平凡社 一九二八年三月) 四二頁
- (13) 『人民戦線』創刊号 一九四五年十二月 二九頁、十三頁
- (14) 「人民に訴ふ」(『赤旗』第一号 一九四五年一〇月二〇日)、社会運動資料刊行会編『日本共産党資料大成』(社会運動資料刊行会 一九五一年) 三頁より引用。
- (15) 「日本共産党行動綱領草案」(『赤旗』第三号 一九四五年一月二二日)、社会運動資料刊行会編 前掲書 一三頁より引用。
- (16) 「日本共産党規約草案」(『赤旗』第三号 一九四五年一月二二日)、社会運動資料刊行会編 前掲書 一三頁より引用。
- (17) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』(上) 三浦陽一他訳(岩波書店 二〇〇一年) 三六四頁
- (18) 「日本共産党行動綱領」(『赤旗』第二十六号 一九四八年四月一日)、社会運動資料刊行会編 前掲書 一九三頁より引用。
- (19) 「日本共産党改正規約」(『前衛』第二十六号 一九四八年四月)、社会運動資料刊行会編 前掲書 一九六頁より引用。
- (20) 「ポツダム宣言と民主民族戦線の精神」(『アカハタ』第四百五十八号、四百五十九号 一九四八年八月十九日、二〇日)。社会運動資料刊行会編 前掲書 一三三頁より引用。
- (21) なお、一九四七年五月一日の「日本共産党規約」には「朝鮮人部」は無くなっている。
- (22) 「主張と批判 大衆は審判する」(『人民戦線』第二五号 一九四八年八月) 一頁
- (23) 朴英熙「初期の文壇側面史(第四回)」(『現代文学』一九五九年二月) 二六四—二六五頁
- (24) 『人民戦線』創刊号 一九四五年二月 一三頁
- (25) 『人民戦線』創刊号 一九四五年二月 一三二頁
- (26) 中西も金日成について次のように言っている。「筆者の思い出の多い平壤——同志金日成、その他の人々は、不屈不撓の革命的情熱をかたむけて、全人類の平和と幸福のために今や勇ましく戦っているであろう。」(中西伊之助「思い出の北鮮・平壤」人民戦線二五号 一九四八年八月 二九頁)